本屋のない町なんて

新型コロナウイルス禍は、やや落ち着きを見せつつあるとはいえ、予断は禁物だ。ウィズ・コロナとコロナとの戦いと、和戦両様の構えをしばらく続けるしかあるまい。

そこで前号に続き、秋の夜長には読書を、とお勧めする次第。今回の趣向は、主人公が本屋さんというガブリエル・ゼヴィンの『書店主フィクリーのものがたり』（小尾芙佐・訳。本屋大賞・翻訳小説部門。ハヤカワｅｐｉ文庫）である。

〈アメリア・ローマン〉は三十一歳、出版社の営業担当。マサチューセッツ州のアリス島へ初めて渡った。訪問先は、島で唯一の書店「アイランド・ブックス」だ。

三十九歳の書店主〈Ａ・Ｊ・フィクリー〉は偉ぶった偏屈な変わり者という評判だが、案の定、互いに散々（さんざん）な初対面となった。

その夜、深酔いしたＡ・Ｊの酔夢の中に、妻の〈ニック〉が現れた。ニックは一年余り前、自動車事故で死んだのだった。

これだけは、俺が先だ

過日、ある事情で、行動の自由はほとんどないが時間だけはたっぷりある、という数日を過ごすことになった。前々回の本稿でもそのことに触れて、そんなときは本を読むくらいしかテがない、と書いたが、今回もその続きで、その折に読んだアンソロジー『日本文学100年の名作』（第八巻　薄情くじら）中の一編、開高健の『掌（て）のなかの海』を取り上げる。

小説家になって間もなくの頃、とらえようのない焦燥と不安が込み上げ、黄昏（たそがれ）になると、汐留にある、物置小屋のように小さな酒場に、ほとんど毎夜のようにかよった。

この酒場で、〈高田先生〉と呼ばれる初老に近い人物と顔見知りになる。先生は、凛（りん）、と見える端正（たんせい）さ。オールド・パーをダブルで、ストレートで、それに氷水を添えて、というのが変わることのない好みだ。

現住所は福岡市。若い頃には軍医をしていたが、家は何代にもわたる医院で、その

残照に染まる学び舎

冬の休みの間に、自身が紋章上絵師でもある作家・泡坂妻夫が紡ぎ出す下町の職人世界と男女の機微を楽しもうと手にした短編集『蔭桔梗』（直木賞。新潮文庫）であった。それはそれで十分楽しんだのだが、なぜか今回取り上げることとしたのは、その中ではちょっと、いや、まるで味わいが異なる『校舎惜別』の一遍であった。

「これは恋のお話です。ちょっと風変わりで、悲しい純愛物語を聞いていただきましょう」

〈石塚〉がそう切り出すと、講堂の中が、すうっと静かになるのが判った。

開校六十年の五洋中学の校舎が建て直されることになり、今日は、その惜別の会。むかしこの学校で教師をしていた石塚が、来賓として話しをする役目になったのだ。

石塚はそっと来賓席の方を見た。〈川島皓美〉先生は、ことさら小さく、痩細っている。月日は人に対して容赦ない、と思う。

罪と罰のスクウェア

単行本まで含めると自信はないが、文庫化されたものなら、私はそのほとんどを読んでいる作家が何人かいる。要は、私が大ファンだということなのだが、例えば山本周五郎や松本清張など。現在活躍中の作家にもいて、佐木隆三もその一人だ。「ノンフィクション・ノベル」と呼ばれるジャンルの作品の嚆矢（こうし）はトルーマン・カポーティの「冷血」とされるが、日本では、佐木の「復讐するは我にあり」（昭和五十一年直木賞）だと言われる。

実は、今回の稿ではこの作品を取り上げようと思っていたのだが、書店で、佐木の久しぶりの文庫新刊を目にして、急遽、そちらに切り替える気になった。『わたしが出会った殺人者たち』（新潮文庫）である。

同書には、「復讐するは……」の主人公である連続殺人犯に始まり、私たちの記憶から消し去ることの出来ない、怖るべき事件の主たちが次々に登場してくるが、これまでの佐木の作品群のダイジェストでもあり、作者自身によるその解説といった趣（おもむき）も

ゆるやかに流れ行く時間

寝そべって文庫本を読んでいたのだが、ひょっと、つけっ放しのＴＶに目が行った。マイクを手にした若い男性が、街を行く女性たちに聞いている。

「いま、何でも願い事が叶うとしたら、何が欲しい？」

お金、ブランドものの洋服、ハンドバッグ、装飾品。あるいは車、海外旅行、はたまた、美貌、細い足、恋人……。

思い思いに答える若さで眩しい彼女たち。屈託も衒いもないその笑顔を見ているうちに、ふと言ってみたくなった。

私にも、ときどき無性に欲しくなるものがあるのだが、と。

「お金」でもいいが、まあ無難に「健康」か。それとも、ちょっと気障に構えて「やすらぎ」とでも言おうか。

いや、私がほんとうにほしいもの、それは、ゆるやかに流れる時間、だ。

私にももちろん、青春と呼べる時代があった。それから後の日々だって、決して捨

或る邂逅

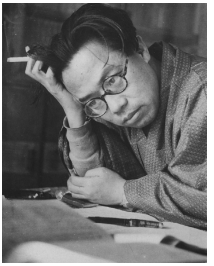
学生時代、デパートで店員のアルバイトをしたことがある。実に楽しい体験だったが、今も印象に残るのが「符丁」の話だ。

お客様相手の仕事だから、例えば、客のいる前で同僚に「トイレに行ってきます」はまずい。「エンポーに……」と言う。おそらく「遠方」なのだろう。昼時は交替で食事を摂るのだが、この場合は「キザエモンに行きます」と言う、と教えられた。

さて、この「キザエモン」が、どうして「食事」なのか分からない。本職の店員さんに尋ねても、「さあ」と可愛らしく首を捻るばかり。結局は分からずじまいだった。

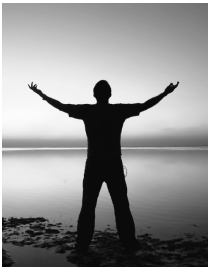
ところが、それからかなりの時を経たある日、通勤途中に江戸川柳を扱った本を読んでいると、江戸時代の洒落言葉で、空腹のことを「嘉左衛門」と言ったという下りがある。「あ、これだったのか」と思った。

こういうことだ。「嘉左衛門」の当時の発音は「くぁざえもん」だ。それを「喰わざえもん」と洒落て、だから「空腹」。それが「食事」の意味に転じ、いつか訛って「キ



松本清張（1955年、『別冊文藝春秋』第46号）Wikipediaより

日米競演・脱獄



高所恐怖症は珍しくないが、「閉所恐怖症」というのもあるとか。それなら、私などは間違いなく該当する。狭い空間に閉じこめられたことを想像するだけでも息苦しくなり、じわっと冷や汗が出てくるのだ。

少し格好良く言えば、心身の自由は人として最も基本的な欲求であり、人間らしさの最小限の要件でもある。だから、それらを強制的に束縛されることは最大の苦痛であり、恐怖でもあるのだと思う。

考えてみれば、動物でも同じはずだ。よって、愛好家のことをとやかく言うつもりは全くないが、私は動物を飼うのを余り好まない。

映画や小説でも、その種の場面が出てくるのは苦手なのだが、時には例外もある。

ある日レンタルビデオ・ショップで、さしたる理由もなく洋画を一本借りた。ところがこれが実に面白く、秀れた作品で、何だか儲(もう)けものをしたような気がした。

それもそのはず、それは「キネマ旬報」が一九九五年度・洋画部門第一位に上げ、

もう一人の私

日曜日に息子の友だちが二人、遊びにきた。何かに興じる賑やかな声が聞こえていたが、やがて息子が私のところへ顔を出し、一緒に麻雀をやってくれないかと言う。高校生なのに麻雀とは、と思わないでもなかったが、この日は息子の顔を立て、物分かりのいい親父に徹することにした。

そして私は、青春真っ只中の若者たちと卓を囲んでいるうちに、いつか彼らと同じころの自分に戻ってしまったような錯覚に捉われていた。

かつて勤め人や学生の余暇の王座に君臨していた麻雀も、今やすっかりマイナーな存在になってしまった。私も学生時代は大学近くの雀荘に通い、学生寮や友人の家でやれば必ず徹マンになった。社会人になってからも、同僚、先輩たちと、誘い誘われを繰り返した。あのころが麻雀の全盛時代だったろう。繁華街の裏通りなどには雀荘がひしめき合い、それらはいつ行っても「満卓」だったものだ。

男性週刊誌などは競って麻雀の記事にスペースを割き、専門の月刊誌も発行されて